

---

報 告

---

[立教大学経済学部 歴史部会ワークショップ]

## 出土貨幣の研究

——考古学的発掘調査事例を中心に——

櫻 木 晋 一<sup>†</sup>

日 時：2022年11月7日（月）

会 場：12号館 4階共同研究室

報告者：櫻木 晋一（朝日大学教授／下関市立大学名誉教授）

参加者：池上 岳彦（立教大学経済学部教授），西崎 純代（立教大学経済学部特任教授），湊 照宏（立教大学経済学部教授），岡部 桂史（立教大学経済学部教授），日高 卓郎（立教大学経済学部助教），田中 醇（立教大学経済学部助教），安土昌一郎（立教大学経済学部助教），菊池 美幸（立教大学経済学部助教），劉 真如（立教大学経済学研究科博士後期課程），小林 風雅（滋賀県立大学博士前期課程）

司 会：菊池 雄太（立教大学経済学部准教授）

菊池（雄） それでは、立教大学経済史・経営史ワークショップを開始いたします。司会を務めます立教大学経済学部の菊池雄太です。本日は、下関市立大学名誉教授で現朝日大学教授の櫻木晋一先生に、ご専門の「貨幣考古学」について、レクチャーして頂きます。今回は、櫻木先生による第2回の講演となります。第1回は、2020年11月13日に開催されました\*。コロナ禍によるオンライン開催でしたが、貨幣考古学の草分けである先生の研究生生活を振り返る形で、当分野はどのような学問であるのかを教えてくださいました。第2回となる今回は、貨幣考古学の研究の仕方について、より具体的にお話しして頂きます。ようやく待ちわびた対面での開催です。それでは櫻木先生、よろしくお願いします。

櫻木 ご紹介いただきました櫻木です。本日は若手の先生方にもお集まりいただきありがとうございます。では早速話を進めたいと思います。

---

<sup>†</sup> 朝日大学経営学部教授・下関市立大学名誉教授

\* 第1回目の記録は『立教経済学研究』第74巻4号、2021年3月、pp.81-114に掲載

ユーラシア大陸の貨幣を俯瞰してみると、大きく分けて東アジア型とヨーロッパ型が存在すると思います。つまり、東アジア型が青銅製の鑄造貨幣、ヨーロッパ型が打造貨幣の金貨・銀貨という区別で、南アジアのインドはヨーロッパ型です。

私がこれまでに出土貨幣の調査で訪問した外国は、東南アジアのベトナムとラオスです。また、博物館所蔵資料を実見するために中国と韓国、ヨーロッパを訪ねました。この2年半はコロナ禍でどこにも行くことはできませんでしたが、今年（2022年）の8月下旬に約1ヵ月間ヨーロッパを訪れました。まずイギリスのケンブリッジ大学、次にスコットランド国立博物館が所蔵している日本貨幣を調査しました。さらにマンチェスター大学で学会（BAJS）に参加し、ポーランドのワルシャワ大学で学会（INC）発表をして、最後にコペンハーゲンにあるデンマーク国立博物館で所蔵日本貨幣の最終調査を実施しました。私の専門は日本史ですが、世界を股にかけて活動しています。

私の専門は貨幣史だと紹介すると、よくヤップ島の石貨を話題に出されますが、あれは通貨ではありません。タカラガイについては実際の通貨として使われていた可能性が高いと考えていますが、これらは威信財としても古くから使われていました。世界を見渡すと価値をもつ物品が金属貨幣に発展し、さらには紙幣が生まれ、現在では現物の貨幣がなくなるのではないかとされています。貨幣史研究者としては将来の貨幣についても考えなければならないと思うのですが、私が専門にしているのはおもに前近代の金属貨幣です。日本では江戸時代に藩札、私札などの札類がたくさん発行されており、これらの研究も必要だと思うようになったので、数年前から取り組んでいます。

前回のワークショップの最後に、私がこれまでどういう方法で貨幣史を学び研究してきたのかという質問がありましたので、まずそれに対しては体系的に学んでいないとお答えします。私は商学部3・4年のゼミでアジアの生産様式を学び、大学院商学研究科に進学してからこのテーマを追求したのですが、自分には理論的な研究があまり向いていないことに気づかされました。日本古代社会の階級展開期を研究していたため文学研究科の授業にも出席しており、自分なりに考古学を勉強していくうちにフィールド調査が大切だと考えるようになりました。そこで、縄文時代の考古学者として有名だった江坂輝弥先生に、遺跡の発掘調査に参加したいとお願いしたら、現在は東急電鉄の車両基地になっている町田市「なすな原遺跡」の発掘調査に加えていただきました。そこで珍しい微隆起線文土器という縄文でも古い段階の土器を自分の手で拾った経験をしたことで、考古学は楽しい学問だなと思うようになりました。

修士2年からは港区三田近くの伊皿子貝塚の発掘に参加しました。ここは電電公社の所有地だったので、資金的にも潤沢で徹底的な調査がやれました。この現場で、残存貝量から摂取カロリーを推定するなど最先端の考古学に触れることができ、考古学は単に趣味の学問ではないことを鈴木公雄先生から教えられ、いっそう考古学という学問に興味を持つようになりました。そして、博士課程在学中は埼玉県埋文事業団の上越新幹線・東北新幹線敷地内の発掘調査にも

プレハブに泊まり込んで参加しました。ですから、私は商学研究科に所属していましたが、修士と博士の計4年間くらいは考古学専攻生と同様にフィールドに出て、実際に発掘調査をやっていたわけです。現場での作業はかなり重労働なので、デスクワークをやっている人間がちょっと発掘現場に行ったら遺物を見せてくれというのは、良いところ取りをしているようでやや後ろめたいのですが、現場経験があるという意味で私は非常によい経験をさせてもらったと思っています。

また、私は順調に大学の教員になれたわけではなく、3年間は学習塾の講師をしており、その時期は研究がまったくできませんでした。幸い、短大の専任講師に復帰したので、遅れを取り戻すために人の3倍ペーパーを書こうと頑張っていた時に、鈴木公雄先生から九州内の遺跡で出土している六道銭に関するデータの集積を頼まれたので、それを引き受けて精力的にやりました。一連の出土銭貨研究で科研費も取れましたし、研究費には恵まれていました。

最近は大学教員の業務が増え、例えば入試のために高校回り、あるいは就職のために企業回りなどの業務もあるかと思います。特に若い先生方に伝えたいのは、そういう時間も自分の研究のために活用すべしということです。旅費が出るわけですから、私は本来業務を終えた後、訪問した土地で積極的に現地調査をしていたら研究実績が上がり、公募で下関市立大学に教授として移ることができました。下関市立大学に勤務していた23年間は、片道約2時間をかけて福岡市から遠距離通勤だったので、通勤時間も研究に活用しました。

私が住む博多には中世の都市が埋まっています、今でも継続的に発掘調査がおこなわれているので、まずは博多遺跡群から出土した銭貨に関して特徴的なこととお話しします。出土銭の研究対象は一括出土銭と個別出土銭とに大きく分けることができますが、中世個別出土銭調査の代表例が博多遺跡群です。福岡市は人口約164万人の政令指定都市で京都や神戸より人口が多く、福岡市教育委員会は小規模な県よりもスタッフが豊富です。これまで実施した博多遺跡群の調査地点は250ヵ所を超えており、調査区域が点から面に展開しているのでいろいろなことが明らかとなり、私は『貨幣の地域史』（岩波書店、2007年）で博多における個別出土銭からわかることをまとめました。

博多遺跡群の中央には、博多駅から博多湾に向かって大博通りというメインストリートが伸びています。私が高校生の頃はこの道幅が現在の半分しかなく、それを拡張すると同時に地下鉄建設工事もおこなわれました。博多の地盤は砂質で崩落しやすく、地下鉄を作るために上から掘り進めると遺構がたくさん出てくるので、調査のために工事はずいぶん遅れましたが、その成果として中世都市の全貌がかなり見えてきました。

歴史研究にとって、実物の資料を手にとって観察することはとても大切です。福岡市埋蔵文化財センターに収納された遺物や、発掘現場で未整理の資料を見ることができたので、私にとって博多遺跡群はとても良いフィールドとなっています。ここからは、奈良・平安時代のいわゆる皇朝十二銭も出土しています。古代の博多に政府関係の重要な施設があったという記録は

ほとんど残っていないのですが、重要な港として機能していたことは間違いないので、古代の貨幣が出土することは予測できました。古代銭貨の出土場所から、政府関連の施設があった位置を推測できるのです。

中国の銭貨には一文銭・二文銭・三文銭・五文銭・十文銭があり、大きさが違います。二文銭以上のものを大銭とよび、中世の日本ではこの大銭は流通していません。日本は中国の貨幣制度を取り入れましたが、一文銭だけを受け入れたのです。ところが、博多ではこの大銭が出土する頻度が高く、最初は例外的にここでは流通していたのだろうと考えていましたが、後にそうではないことが分かりました。それについては後でお話します。

博多遺跡群では銭貨を作るための鋳型が出土しており、石製鋳型については今のところ日本ではこの1点だけしか確認できておらず、粘土製の鋳型も1点出土しました。博多のような都市部であれば銭貨生産をしていただろうと予測していたので、それなりの遺物が出てきたわけですね。

博多遺跡群に近い箱崎遺跡群は、九州大学が移転したことでかなりの面積を調査できるよう

表1 出土銭種別順位

順位	鈴木備蓄銭データ		三宅窖藏銭データ		博多遺跡群		堺環濠都市	
	銭貨名	枚数	銭貨名	枚数	銭貨名	枚数	銭貨名	枚数
1	皇宋通寶	395,737	元豊通寶	69,139	元豊通寶	536	皇宋通寶	160
2	元豊通寶	379,386	熙寧元寶	54,489	皇宋通寶	489	元豊通寶	135
3	熙寧元寶	301,385	皇宋通寶	47,973	開元通寶	381	元祐通寶	101
4	元祐通寶	278,779	開元通寶	40,528	熙寧元寶	358	開元通寶	99
5	開元通寶	256,178	元祐通寶	39,376	元祐通寶	341	熙寧元寶	92
6	永樂通寶	211,151	祥符元寶	25,197	洪武通寶	243	洪武通寶	66
7	天聖元寶	157,101	天聖元寶	24,635	天聖元寶	200	天聖元寶	57
8	紹聖元寶	130,663	紹聖元寶	16,176	政和通寶	197	紹聖元寶	54
9	政和通寶	124,189	治平元寶	15,951	永樂通寶	193	聖宋元寶	48
10	聖宋元寶	120,635	政和通寶	15,878	紹聖元寶	162	永樂通寶	48
11	洪武通寶	87,683	崇寧通寶	12,907	祥符元寶	159	政和通寶	46
12	祥符元寶	79,760	景德元寶	12,687	聖宋元寶	151	祥符元寶	35
13	景德元寶	71,676	聖宋元寶	12,646	天禧通寶	117	天禧通寶	32
14	天禧通寶	70,320	天禧通寶	12,341	祥符通寶	109	無文銭	30
15	嘉祐通寶	65,031	嘉祐通寶	11,779	景德元寶	92	景德元寶	23

出典：鈴木備蓄銭データは『出土銭貨の研究』（東京大学出版会、1999）、三宅窖藏銭データは『中国の埋められた銭貨』土銭貨研究会、2006）より。

注：三宅データには明銭は含まれていない。

また、熙寧元寶には熙寧重寶、祥符元寶には祥符通寶、治平元寶には治平通寶、嘉祐通寶には嘉祐元寶を含んでいる。

になりました。箱崎遺跡群も博多と同じように砂質です。粘土質の関東ローム層と違い砂の堆積状態を見分けるのは難しく、層位の判定は職人技になります。地域によって土質は違うので、発掘調査の難易度に差があることを知っておいてください。また、宝永4年（1707年）に富士山の大規模な噴火があり、関東には宝永スコリア層という形でこの火山灰が大規模に堆積しています。従って、この層の上下どちらで出土したかによって遺構の年代がはっきり分かります。考古学は層位学という地層から年代を判定できる学問ですが、このように年代がわかりやすい層も存在しているのです。

表1は各地の中国銭出土銭種順位を多い順にならべたものです。日本の一括出土銭では皇宋通寶が第一位ですが、博多遺跡群の個別出土銭を見ると元豊通寶が一番多いのです。淑徳大学の三宅俊彦先生が集めた中国のデータでも元豊通寶が一番多くなっています。この違いは何かについて、現時点では私自身も明確な答えを持っていませんが、もしかすると、日本のある場所で皇宋通寶がつくられていたとか、日本に多く持ってこられた可能性も考えておく必要があります。出土している明銭の洪武通寶や永楽通寶は全体から見るとそれほど多くありません。

(15位まで)

一乗谷個別出土銭		一乗谷一括出土銭		大友府内町	
銭貨名	枚数	銭貨名	枚数	銭貨名	枚数
元豊通寶	858	皇宋通寶	2,184	元豊通寶	184
皇宋通寶	847	元豊通寶	2,107	皇宋通寶	143
熙寧元寶	750	開元通寶	2,061	熙寧元寶	129
元祐通寶	593	熙寧元寶	1,796	元祐通寶	129
開元通寶	515	元祐通寶	1,514	天聖元寶	67
天聖元寶	398	天聖元寶	932	洪武通寶	63
祥符元寶	261	政和通寶	894	開元通寶	58
聖宋元寶	256	祥符元寶	873	紹聖元寶	55
政和通寶	241	聖宋元寶	702	祥符元寶	40
紹聖元寶	232	紹聖元寶	691	景德元寶	36
天禧通寶	222	天禧通寶	643	聖宋元寶	36
洪武通寶	221	祥符通寶	641	永楽通寶	35
景德元寶	210	景德元寶	488	治平元寶	33
永楽通寶	204	咸平元寶	424	元符通寶	31
祥符通寶	166	嘉祐通寶	408	天禧通寶	29

(同成社, 2005), 博多遺跡群は櫻木作成, その他は『歴史空間における銭貨』(出

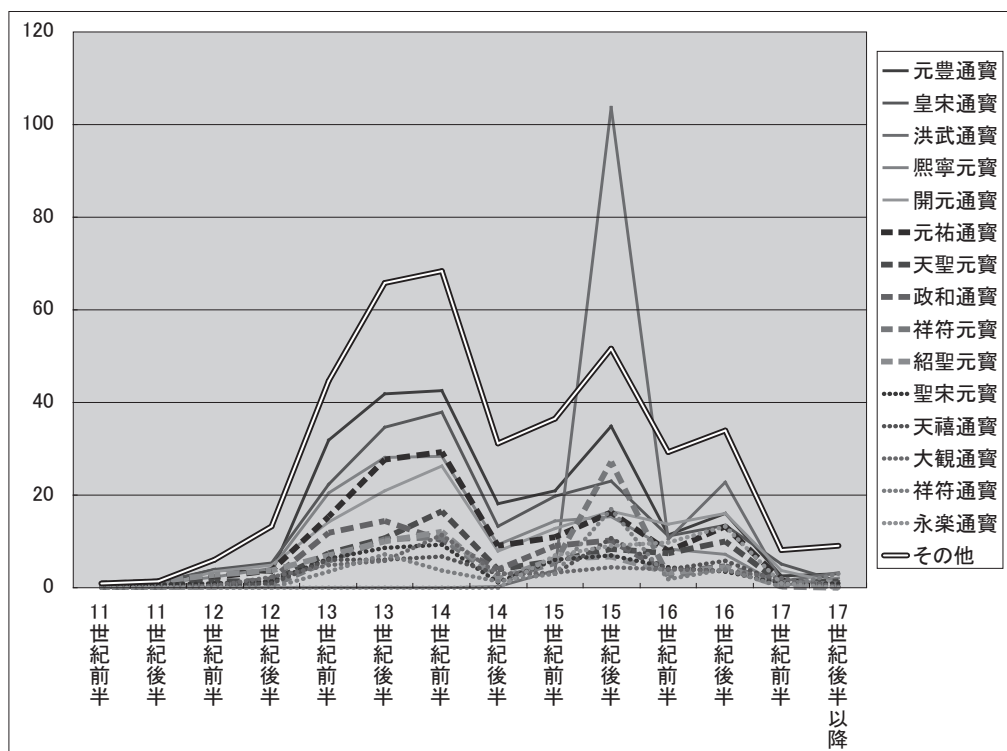


図1 博多遺跡群出土上位15種の変化

図1は博多遺跡群で出土時期が分かる銭種を半世紀毎に分けて上位15種の変化を見たものですが、いくつかのタイプに分かれることが確認できます。例えば洪武通寶は15世紀後半に大きく増えています。時期によって多い銭種は違っており、決して一様ではありません。個別出土銭の多寡で博多という町の盛衰が見えてくると私は考えています。同様に、表1にある通り、大分市の大友府内町遺跡や堺の環濠都市遺跡の個別出土銭を丁寧にデータ化していくと、どの時期にお金が発行されたかがわかり、各都市の貨幣活性が明らかになると考えています。

図2は、博多で出土した大銭は13世紀までに埋没していることを示しています。「当十銭」は外径3.5cmほどのかかなり大きな銭貨で、「折二銭」は一文銭より少し大きい程度です。個別出土銭の場合、遺構の年代が不明確な場合が多く、このデータは遺構の年代が特定できるものだけを集めていますが、「当十銭」は13世紀以降には出土していません。従って、この時期までは大銭が博多まで持ち込まれていたものの、何らかの原因があって博多でとどまり、全国には広まっていないことに気づきました。博多と同様に勘合貿易で有名な堺では、大銭自体の出土例がほとんどありません。その理由は、堺が貿易港として栄えたのは応仁の乱以降であって、博多は古代からずっと栄えていたので、時期的に早い段階では大銭が入ってきたのだろうと推測できます。14世紀の新安沈銭には大銭が積まれていたことから、大きな銭貨は鋳つづけて銅



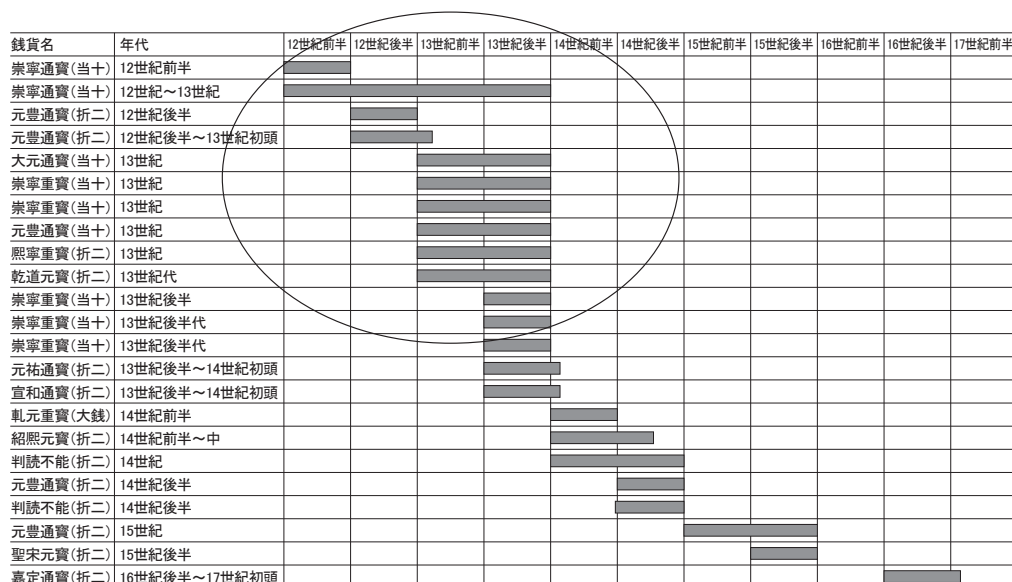


図2 大銭の埋没時期（櫻木2007, 64頁より）

製品の原料として使われていたと私は考えています。

銭貨の資料特性のひとつとして、初鑄年がわかるという利点があります。ただ、それに頼りすぎてはだめで、古い銭貨が出土したからといって遺構そのものが古いとは限りません。模鑄銭の可能性も疑う必要があり、銭貨で時期を判定するのは難しいのです。また、金属は遺存しやすいのですが、鉄銭は劣化してボロボロになり、遺物として検出できないこともあります。博多遺跡群における銭貨の地区別出土頻度を見ると、13世紀前半は現在の博多駅に近いところに多いのですが、時を経るにつれて海側が多くなっていきます。つまり、博多の町は時期によって栄えていた地域が違っていったことを示しています。

イングランドにおける一括出土銭と個別出土銭については、マーク・ブラックバーン氏が一括出土銭では貨幣活性を読み取れないと言っています。（図3）一括出土銭は非常事態の時に埋められるものであり、個別出土銭こそが商業活動の活発さを示しているという主張です。私が日本で同様の検証をやってみたところ、残念ながらこれらの間に顕著な差は見出せませんでした。また、東西ユーラシア貨幣を比較すると、西洋では金・銀素材が中心で、日本や中国では銅が中心という素材と流通状況に違いがあります。日本や中国では貨幣は長い期間伝搬し使用されるので、古い貨幣が新しい時代になっても使われます。しかし、ヨーロッパでは通貨は短期間で作り替えられ入れ替わっていくので、遺構の時期を判定する上で分かりやすさがあり、この意味で東ユーラシアにはハンディキャップがあります。

ここで少し思い出話をさせてください。私が東北中世考古学会に参加していた時、石井進先

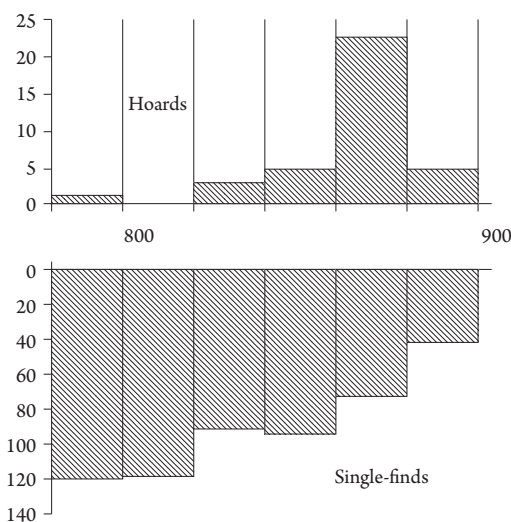


図3 イングランドにおける一括出土銭と個別出土銭  
の比較（『貨幣に見るダイナミズム』30頁より）

生から「うちの若い衆がお世話になっています」とお礼を言われたことがあります。これはどういうことかという、私は中島圭一氏と組んで科研をやっていたので、石井先生は自分の弟子の研究動向に注意を払われていたのです。著名な学者の細やかな心配りに感激しました。石井先生は日本史の研究成果を世界に発信する努力をされていましたが、石井先生と仲の良かった網野善彦先生とは、山梨県石和にある帝京大学の文化財研究所で毎年おこなわれていた中世研究会で、夜を徹して一升瓶に入った赤ワインを飲みながら歴史研究について議論したことが懐かしく思い出されます。

菊池（雄） ここまでについて質問やコメントがあればお願いします。

安士 博多に関して、中国でのみ流通している貨幣が見られるということで、貨幣の散らばり具合から遺構がどのような機能を持っていたか推測できるとおっしゃっていましたが、博多は港なので両替商のようなものがあり、そこに中国のみで流通している貨幣が入って、そこで日本で使われている貨幣と何らかのレートで交換されたということはないでしょうか。

櫻木 中世の博多では中国人が商業に就業していて、そこで日本人が商行為をおこなっていたというイメージを私はあまり持っていないのです。博多に両替商的なものがいたかもしれませんが、1323年の新安沈銭には大銭が大量に含まれていたのです。博多に持ってこようとしていたのは考古学からみて間違いありません。商いの中で両替がおこなわれていたかについても確証はありませんが、全面的に否定できるものでもありません。ただ、全国の遺跡から大銭が出土していないという事実は、大銭がゆきわたっていないからだと推定できます。

菊池（雄） 日本で製造されていた可能性もあるとおっしゃっていましたが、実際にそのよう



な例はありますか。

**櫻木** 鋳型の出土は、そこで作っていた証拠になります。あるいは未完成品の出土も証拠となり、日本で一番古い時期の鋳型は京都、鎌倉、そして博多、堺の順となります。最近では、かながわ考古学財団が調査し、伊勢原市で出土した銭貨の鋳型も新資料として存在し、これについては報告書もすでに刊行されています。これらの資料によって貨幣がつくられていた場所を特定できるようになってきました。

**菊池（雄）** 出土した銭貨を見ただけでは、日本でつくられたものかどうかかわからないのですね。

**櫻木** 日本製かどうかを見ただけで区別するのは難しいです。というのは、中国銭を鋳つぶして作り直したら成分はまったく同じになり、判別できません。では文字がぼやけていれば模鋳銭かという、これは地中に埋まっている間に劣化した可能性も考えられます。一つだけはっきり言えることは、中世末～近世初頭にかけて日本でつくられた銭貨には銅の割合が非常に高いものがあり、さらに微量のヒ素が入っている場合は日本銭と判定できますが、肉眼観察での判別はなかなか難しいです。

では次に移り、私が最初に取り組んだ出土銭貨研究のテーマは六道銭なのでそのお話をします。大分県日田市尾漕2号墓からは311枚の銭貨が紐でつながった縋銭状態で出土しました。図4で白く見えるのは、鉛が劣化して粉のようになっているのです。これを1枚ずつはがして、どんな種類の銭貨で構成されているかを調べました。調査担当者は鎌倉時代の墓だと推定していましたが、朝鮮通寶（1423年初鋳）が含まれていたので確実に15世紀以降のものです。担当者は出土している土師質の素焼きの皿で年代判定をしていたのですが、これは中世墓の年代判定の難しさを示しています。

近世になると「南無妙法蓮華經」と文字を刻んだ題目銭、「南無阿弥陀仏」と刻んだ念仏銭とよばれるものが存在しますが、これらは通貨ではありません。これらの多くは墓に副葬され



図4 大分県日田市尾漕2号墓の出土六道銭（櫻木撮影）

ており、題目銭より念仏銭の方が圧倒的に多く、関東の墓からはときどき出土します。これらはおそらく17世紀中期以降のものです。私の想像では、徳川幕府が寛永通寶をつくるようになると、民間で勝手に銭貨を鑄造することはできなくなり、銭貨をつくる技術を持っている者が銭貨に似せた「銭形製品」をつくっていたのではないかと考えています。江戸の天徳寺4号墓からは、表が寛永通寶、裏に「南無阿弥陀仏」とあるものが出土しており、これはまさに、にせがねです。また、小倉駅前京町遺跡では粘土で作られた丁銀を模した土製品が出土しており、これには小さな穴が一カ所開いています。そこに紐を通して死者の首からぶら下げていたのだと思います。この近くの宗玄寺跡では、頭骨の口の中に入れられて出土した慶長一分金の例もあります。また、全体に布目が付着している緡銭の例は、銭貨が布袋に入れられて墓に納められていたことを示しています。考古学的には、人間がどういう形態で埋葬されていたのかを観察する必要があります。習俗の分野であれば六道銭の埋納の仕方も問題になるのです。九州の事例で、あぐらをかいた遺体の太ももの上に六道銭が置いてあるものがありました。また、横に寝かせた側臥位状態のお腹のところに六道銭が置いてある例もありました。どこにどういう形で銭貨を埋納したかという点も、民俗学の研究者にとっては重要なのだと思います。さらに、早桶の底板の上にバラで銭貨が置かれている例や、紐で2枚の銭貨を結んでいるものもありました。必ずしも六道銭は6枚組ではなく、鹿児島のように7枚組が多いという地域性も存在します。

江戸近郊で出土する早桶には、骨や銭貨以外にも漆の椀や櫛などが副葬されているものがあり、柄杓が副葬されたものはおそらく伊勢参りをした人の墓だろうと思います。また、近世墓を丁寧に発掘調査すると、薄い木製の銭貨のようなものを検出できることがあります。六道銭として本物の銭貨を埋めてはいけないというお触れが何度も出ていますので、それを遵守した人は木製の銭貨に似せたものを一緒に埋めたのではないのでしょうか。墓坑については円形や方形のものもあり、お墓についてはあまり研究がないので、考古学でももっと研究してほしいと思っています。

次は、一括出土銭に話を移します。まず緡銭について説明すると、中世の一緡は97枚が多い。文献によると、銭貨が97枚、2文は紐代、1文が加工賃で、一緡100文となっています。一括出土銭が木箱に収められている場合は、見つかった時点では箱が原型を止めていない場合も多いですが、長野県西条・岩船遺跡の一括出土銭はクリーニングすると緡銭が整然と並べられていました。これに対して、新潟県小重遺跡の一括出土銭は上の方は緡銭になっているものの、下層はばらけた状態で容器に入っており、収納の仕方は一様ではないのです。甕に割れ目があると、そこから土が入ってしまいます。また、銭甕が1つ見つかり、近くから2個目、3個目と出てくるとも結構あります。

遺跡の調査期間は限られているので、計画に沿って迅速にやる必要があります。しかし良好な遺物が出てくると、急いで取り上げるわけにはいかないので現状を維持したまま、別の遺構

の調査をすることがあります。図5は大分市万寿寺跡の緡銭で、遺物を取り上げる前日に見せていただきました。これは5貫文緡の約5,000枚が2つ一部重なっており、貴重な遺物なのでこのままの形で取り上げ、レプリカも作られています。

私が調査に加わった山口県岩国市の中津居館跡は、弘中氏という中世の豪族が住んでいた居館跡だと言われています。私が最初にここの遺物を見た時には、銭塊の上に薄い木の板が載っていたので（図6）、まずそれを取り除きました。そして、専門業者の手で上面の緡銭間にできた隙間をティッシュのようなもので埋めて（図7）、ウレタンを吹きかけ、まず上の方を固めてから、次に側面を固めて一括出土銭全体をパッキングしました（図8）。これは出土した状態のままで遺物を遺跡から取り上げる方法です。このウレタンで固めた塊をクレーンで持ち上げ、博物館の中に運び込み、室内で整理作業を実施しました。イギリスでも同じような調査方法をとっており、バースの遺跡からローマ貨幣がかたまって出土し、サウサンプトン大学に搬入して調べています。現在の調査技術では、X線写真を使うと壺の中に入っているものが透過でき、CTを使うと緡銭を剥がさずに銭貨の文字も読み取れます。



図5 大分市万寿寺跡の一括出土銭（櫻木撮影）



図6 中津居館一括出土銭（報告書より）

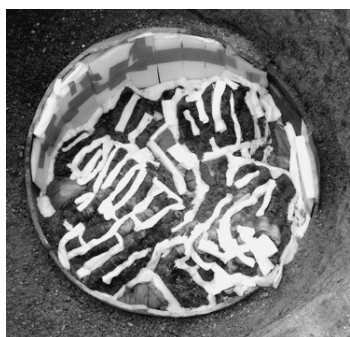


図7 中津居館一括出土銭の取り上げ①（報告書より）



図8 中津居館一括出土銭の取り上げ②（報告書より）

2017年に埼玉県蓮田市の新井堀之内遺跡から大量の古銭と木簡が出土し、マスコミで大きく報道されました。遺跡の発掘調査中に、図9に示した青い蓋のような石が見え、何かが下にあると考えられたので、掘ってみたら大きな甕が出てきたわけです。注目してほしいのは、写真で層位の断面を見ると黒い部分と茶色の部分があり、黒い部分は甕が埋められたあとに誰かがそこを掘ったという痕跡です。そして、遺物との間に茶色の層が薄く残っているということは、あと少しでこの甕が見つかるところまで掘られたが、結局到達できずにあきらめたのです。このように考古学は土層断面を観察することで、さまざまなことが解明できます。この蓋は少し割れていましたが、一括出土銭はこのままの形で保存することになりました。福井市の大安善寺跡からは一括出土銭が出土し、一緒に入っていた木簡には明応9年（1500年）とありました。年号が明らかな資料は大変珍しい例です。

銭貨を調査することが、どのくらい不健康かということがわかる現場の写真が図10です。手袋をして、下にはまな板を置いてワイヤブラシで銭を磨いていきます。細かい緑青などのほこりが舞い上がります。銭貨は金属なので、歯ブラシのようなものでは役に立ちません。銭貨に横から光を当てると、読めなかった文字が読めることがあります。九州国立博物館では、展示物を調査するのは閉館後にしかできないので夜に調査しました。

銭貨は1枚ずつ丁寧に鑑定します。私が見ると、図11には叶手元祐通寶という日本製の銭貨が含まれていることがわかります（上中央は洪武通寶）。中国でつくられた元祐通寶とは同じ篆書でも文字の特徴が異なっており、成分鑑定をしなくてもわかります。ただ、ほとんどの人が文字の違いにはそれほど注意を払わないので、そのことに気づきません。九州歴史資料館の倉庫に収蔵されている柳川市上町遺跡の出土銭貨にはこの叶手元祐や大隅国でつくられた加治木洪武が相当数混じっており、私に時間ができたらこれらを徹底的に調査しようと考えています。17世紀前半の北部九州、筑後国でどのくらい日本製の銭貨が混ざって流通していたかわかると考えるからです。加治木洪武が出土している場所は鹿児島・宮崎が中心で、一部は長崎



図9 新井堀之内遺跡一括出土銭検出前（報告書より）



図10 銭貨の錆落とし作業（櫻木撮影）



や筑後でも出土しており、全国的というわけではないのです。叶手元祐は九州でも西の方で出土しています。叶手元祐がどこでつくられていたかわかっておらず、佐賀鍋島氏の文献記録には銭をつくったという記録はあるものの、銭貨の種類がわかりません。もしかしたら、それが叶手元祐かもしれないと思っているのですが、もう少し資料を集めてから考察する必要があります。

これからは古代関連のお話をします。山口県美東町の長登銅山では毎年銅山祭りをやっていて、図12のように堅型炉を使って復元実験をしています。炉の下方から溶けた金属が流れ出し、それが冷えて固まります。温度計も設置されており、金属が何℃で溶けるのかといった確認もしています。火床炉で銅地金をつくと、炉底に餅のようなもの残り、大英博物館にも似たようなものが展示されています。円筒堅型炉でも一番下の部分には同じようなものがあるので、そういうものが出てきたら、炉の一番下の部分だったことがわかります。復元実験の良いところは、新たにできた金属を自由にカットすることができることです。そうすると、たとえば銅がある部分だけに集中していて、他の金属は別の場所に集中しているといった偏在の様子がわかります。だから、実験は非常に大事なのです。

山口県には古代の造幣局が2箇所ありました。最初は長門鑄銭司にあり、それが周防鑄銭司に移動しました。私が調査に関わった周防鑄銭司の第4次調査区からは、大量のるつぼなどが集積している場所が見つかったので、間違いなくここで銭貨が大量につくられていたことがわかります。古代銭貨の長年大寶（848年初鑄）が固まって出土し、X線CT画像からこのすべてが長年大寶だとわかりました。つまり、周防鑄銭司では長年大寶をつくっていたのです。また、長年大寶以外にも承和昌寶の破片が出土し、今年の春には饒益神寶の破片が出土したことをプレス発表しました。周防鑄銭司は和同開珎ほど古い時期のものはありませんが、文献に書き残された通り、ここでは平安時代にいろいろな銭が継続してつくられていたことがわかりました。



図11 叶手元祐通寶などの銭貨（櫻木撮影）



図12 長登銅山復元堅型炉（櫻木撮影）

また、下関市での和同開珎関連記事は2010年に報道されました。ここは長門鑄銭司があった場所で、和同開珎をつくっていたことはわかっているのですが、現在では民家が建て込んでいて調査ができないのです。そこで下関市教育委員会は、民間業者が掘削工事をするときには土中のものに注意してほしいと伝えていた結果、鑄造関連遺物である木簡などが出土しました。この木簡の文字から天平2年（730年）に長門鑄銭司は稼動していたことがわかったのです。木簡は水につけておかないと変形するので、私が実見した時は水に浸けて保管されていました。また、同時に出土した小さな鑄型の破片も1点ずつシャーレに入れて保管されています。鑄型片は非常に小さいものなので、大量に出土すればそれが鑄型片とわかりませんが、1点ずつだと検出は非常に難しいです。

次は近世のお話して、北九州市の黒崎鑄銭場は近世初頭に銭をつくっていたと推定できる場所です。黒崎城は1615年の一国一城令によって廃城となっており、この城下町がいつまで稼動していたかは明白です。つまり、寛永通寶の発行は1636年以降なので、1615年から寛永通寶がつくられる前までの遺構であることがわかりました。近世のるつぼは、古代のお椀型ではなく砲弾型という特徴があり、ここでは砲弾形のるつぼが出土しています。また、この地域で元通國吉という銭をつくっていたという伝承が残っています。ただし、この銭銘の出土物はこれまで確認されていません。私が過去に調査をしたイエナ大学ではその元通國吉を所蔵しており、大変驚きました。おそらくこれは江戸時代の蒐集家が、この伝承を元につくったものだと思います。鹿児島県の加治木銭の調査でも、やはり砲弾型の坩堝が見つっています。

図13は、京都市八条で寛永通寶をつくっていた鑄銭場の遺跡を京都市が調査した際に出土した砥石です。丸い銭貨の側面を磨くので、砥石が円形にくぼみます。銭貨をつくっていた場所ではこういう砥石が出土することが多いのですが、必ず見つかるというわけではありません。図14は中世の資料ですが、崇寧重寶（1103年初鑄）の当十銭です。左上に枝が残っているの、この銭は完成品でないことがわかります。しかし、なぜ長崎の壱岐でこれが出土したのかわか



図13 銭貨を磨いた砥石（櫻木撮影）



りません。中国から未完成品を持ってきたのでしょうか。図15の沖縄県今帰仁城で出土した銭貨はかなり変形しています。これほど変形するのはかなり被熱しているということなのですが、金属の専門家に詳しく解析してもらう必要があります。

太宰府天満宮一の鳥居は元禄9年（1696年）に建立されましたが、その鳥居を初めて解体したところ、多くの銭貨が継ぎ目にはさまっていました（図16）。その銭貨の構成比は古寛永、文銭が大半で、渡来銭はわずかです。元禄10年から大量に発行された新寛永が混じっていないので、これはまさに元禄9年の銭貨構成を閉じ込めたタイムカプセルと考えられ、一級資料です。高さ2mのところにつなぎ目があったことが幸いして、新しい銭が差し込まれなかったのだらうと思います。

熊本県益城町砺川古銭の調査は、地元の歴史好きの方々に調査方法を手ほどきして、民家の床の間を借りて作業をしました。枚数を数えながら新しい100枚の緋銭をつくっていき、全体の銭種構成を明らかにしました。この調査は科研費を使って実施し、期限が限られていたので、期間内には寛永鉄銭のブラッシングが終わらず、報告書には詳細な寛永鉄銭の分類は載せることができませんでした。これから私の研究室でこの寛永鉄銭について調査をしようと思っています。



図14 崇寧通寶の枝銭（報告書より）



図15 今帰仁城の出土銭貨（櫻木撮影）

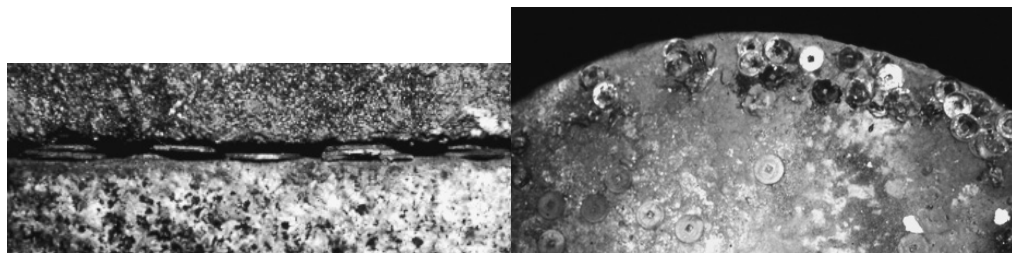


図16 太宰府天満宮一の鳥居の銭貨とその解体写真（太宰府市教育委員会）

遺跡ではその土地の特徴を持った遺物が出土します。出島ではオランダ銀貨が何枚も出てきます。図17は1724年製の2スタイフェル銀貨ですが、西洋の貨幣には年号が刻んであるので年代の特定が簡単です。私はケンブリッジ大学に2001年に留学していたのですが、前年の2000年ケンブリッジ大学モードリン・コレッジの近くで下水道工事をした際、マンホールの中から約1,800枚の銀貨の上に9枚の金貨が載った形で hoard（一括出土銭）が発見されました。

菊池（雄） ここまでについて質問やコメントがあればお願いします。

安士 念仏銭などについてはどこでつくられていたのですか。銭貨をつくるところで別の事業としてつくられていたのでしょうか。それとも、専門の製造業者のようなものがあったのですか。

櫻木 明確には特定できません。中世末から近世初頭は、政府がお金をつくっていたわけではないので、だれでも自由に銭貨をつくれたのです。鑄造技術を持った者が穴あき銭をつくっていました。しかし1636年以降は幕府公鑄貨が発行されたので、勝手にお金をつくと現在と同様に大罪になります。おそらく技術を持った人間は、専業か副業かはわかりませんが、自分の技術を活かすために銭形の製品をつくったのだろうと考えています。念仏銭は17世紀中期から後期にかけての墓に入っていることが多いことから、このように推測しています。

西崎 お金を埋めてはいけないというお触れが出たというお話がありましたが、なぜお金を埋めてはいけなかったのですか。

櫻木 経済的に機能しているお金を、なぜ墓の中に死蔵するのかということですが。マネーサプライの観点から、通貨の減少を招くことをしてはいけないということですが、何回もそういうお触れが出されているということは、やり続ける人がいたということです。お触れを遵守する人は、墓に紙や木でできたお金を入れたのではないかと考えています。

菊池（雄） 貨幣を埋めるという行為は、中世の西洋でもありました。ただし西洋では、自分の貨幣が領主に回収されるのを回避するためと説明されます。つまり、領主は折々に流通貨幣を回収して、打ち直し、また流通させます。その際には、含有されている貴金属の一部を抜き



図17 出島出土の西洋貨幣（長崎市教育委員会）

取り自分の収入とし、同じ額面で金属含有量の低い貨幣、つまり悪貨を再流通させます。それへの防衛行為として、民衆は自分の貨幣を埋めて隠す、というわけです。西洋では貨幣の死蔵はこのような理由で説明されますが、日本の場合には貯める理由が違うということですか。

櫻木 鎌倉時代の青砥藤綱という武士が川にお金を落としてしまって、それを回収するには松明の費用に落とした以上のお金がかかる。それでもお金は貴重なものなので回収しなければならないという逸話が残っており、お金というのは西洋の再鑄造とは違った意味で、ただ貴重なものなので死蔵してはいけないということなのではないでしょうか。

菊池（雄） 民衆側、つまり貨幣の所有者側が埋める、というのはどのような意味があるのでしょうか。

櫻木 埋めることには宗教的な意味がありますよね。でも政府としては、そういう目的で貨幣を使われると通貨供給量が足りなくなることが懸念されると私は理解しています。土の中は一番安全な隠し場所なのです。

菊池（雄） わかりました。他にも、戦争や略奪を防ぐといった様々な理由がありますね。

櫻木 はい。ただ、最初に東西ユーラシアの違いとして述べたように、材質も違いますし考え方も違うと思います。

菊池（雄） わかりました。

日高 先生のアプローチは出土した貨幣の種類や量を記録されていますが、この2つの情報からどういった解釈を引き出されているのですか。たまたま現在まで残った「ある地点」から貨幣が出てきたわけで、出土したサンプルのみから解釈を考えることになりますが、そこから可能な解釈の範囲は「このような場所から出土したので、その貨幣が実際に使われていた可能性が高い」で止まってしまうですね。

櫻木 まさにその通りで確定的なことは言えません。考古遺物は自分から語ってくれるわけではないので、我々研究者が何かを語らせようとする種類や量に注目します。貨幣が流通し商業的に使われていればマーケットなどで落ちることがあるので、落ちている貨幣は当時使われていたものだろうと推定できます。ただ、埋納という別の意味が込められている場合には、銭名などを選ぶ可能性があります。だから、両者を一緒にできない。つまり、個別出土銭をデータベース化する時には、呪術的な性格だと思われるものはオミットして、それ以外のものの銭名を調べるのです。しかし、博多遺跡群で見たように洪武通寶だけが非常に多く出土する時期があって、そこにどんな理由があるだろうと考えた場合、大量に流通していたのだろうという解釈になります。出土数の多寡というのは、使われていたか使われていなかったというマネー・アクティビティとして見るしかない。それ以上には明確な解答が出ません。

菊池（雄） それとの関連で緡銭について、先生の本に書かれてあることに関連しているのですが、緡銭のうち2枚が紐代で、1枚が手間賃、合計3枚引いた緡銭1本が1セットで出回っていた、交換されていたということですよ。先生がご著書で重要だと指摘されていたのは、

97枚ではなく100枚の場合もあって、そこから流通圏が分かるというお話がありました。97枚で取引しているところが1つの流通圏を形成していて、100枚は100枚の流通圏があったと。

櫻木 私はそう考えています。100枚と97枚では枚数が違うので、そこに何か障壁があるだろうと思っています。両替屋や銭屋としては、ここから来た銭はちょうど100枚、こっちからは97枚なので、自分のところで調整するというような話があるかもしれないと思っています。流通圏という意味では、そこは明確に分けておかないといけないのかなと思っています。

菊池（雄） そこは文献史料とあわせて確定していくということですね。

櫻木 はい。以前に紹介した文献の中に、下関より西側は100枚、それより東は97枚と書いてあるのです。でも、東北の青森あたりでは100枚です。文献がすべてを明確に語っているわけではないのですが、少なくとも文献史料と考古資料が一致するところはあるということです。

小林 私の専門が考古学ですので、考古学目線の話になってしまうのですが、炉の形態について、鑄銭用に特別な形態の炉が見つかるといったことや、ある時期から形態が変化するというような研究はありますか。埴埴については特異なものが見つかるということでしたので関連してお聞きしたいです。

櫻木 残念ながら、私はそういう研究をまったく知りません。例えば、鑄銭のための工房だからこのくらいの大きさの炉だったという研究はないと思います。長登銅山では奈良の大仏の原料がつくられていたので大量に銅インゴットをつくっていたはずですが、古代の鑄銭にも銅原料は必要なので、一部は銭貨の鑄造に回していたのではないのでしょうか。そんなことがあって、原料供給地に近い長門や周防に鑄銭司をつくったのだらうと考えていますが、炉の形態等の詳しいことについては申し訳ありませんが知りません。

菊池（雄） では、お話の続きをお願いします。

櫻木 これからは、海外での調査事例を紹介します。私が大学院時代に江坂先生について朝鮮半島の調査に行った時に、公州の武寧王陵という有名な墓の内部に入れてもらえました。今ではこのような文化財に立ち入ることは考えられないことですが、この墓室の入口付近に緡銭が置かれていました。この時にはまだ銭貨の研究をしていなかったのですが、今考えてみるともう少し丁寧な観察しておけばよかったと思いますが、朝鮮半島での出土銭事例です。

三宅先生と一緒におこなったベトナム・ハノイの調査では、私は貨幣考古学の専門家として調査に参加し、第一次調査では1週間くらい滞在しました。1号資料（図17）は非常に大きなもので、壺の口のところは銭が固まっており、固くてはがせないような状態でしたが、それを外すと中には遺存状態の良い銭が2万9千枚以上入っていました。3号資料は、当地の古銭マニアの高校教師が収集のために購入していたものです。（図18）この先生の家に行ったら、ガレージの中に一括出土銭がいくつかあって、自分にとって興味のある銭貨だけを抜き取って集めるのです。これは日本でも行われていた行為で、われわれは研究資料として生きている部分だけをデータ化しました。6号資料は外容器が無く固まった状態ですが、その形状から壺など



図17 1号資料（櫻木撮影）

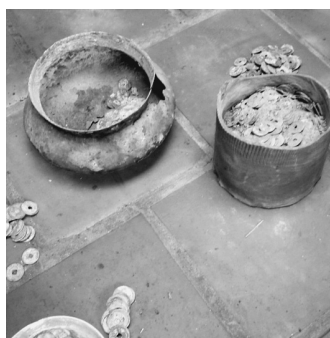


図18 右が3号資料（櫻木撮影）



図19 6号資料（報告書より）



図20 2号資料と緡紐（櫻木撮影）

の容器に入っていたことがわかります。（図19）ベトナムなど東南アジアの人は、こういう資料を部屋に飾っていたりします。普通に骨董屋で売っていますので、このような資料を東南アジアに行けば見かけられるかもしれません。

非常に重要だったのは2号資料で、（図20）入手した時は完形の壺だったのですが、すぐにヒビの部分から割れてしまいました。中身を徐々に剥ぎ取っていくと全貌が見えて、緡銭の紐も残っていました。しかし、調査のために全部壊してしまったので、残念ながら今は写真しか残っていません。タンロンというハノイにある王宮からも日本と同じような緡銭が出土しています。4号資料については、（図21）上の方の銭は浮いており、後に混ざったものの可能性もあるので使えませんでした。ですから上の部分は除外して、生きている資料とみて大丈夫と思われるところだけをデータ化しました。5号資料も（図22）、最初は完形の壺だったのですが、ヒビがあって割れてしまいました。錆の色がコバルトブルーという特徴があり、金属組成が異なっている可能性を考えました。金属の組成分析まではできませんでしたが、内容を調べてみると正規の銭貨ではないコピー銭と思われるものばかりでした。

ハノイで調査したこれら1号～6号資料については、埋められた時期について考えてみまし





図21 4号資料（櫻木撮影）



図22 5号資料（櫻木撮影）

図23 ハノイ民族博物館展示の  
緞をつくる定規（櫻木撮影）

た。私自身は、日越関係を調べる資料として16世紀後半から17世紀の一括出土銭を探していたのです。骨董屋に行くといくつもの一括出土銭を売っており、例えば農家の人が畑から出てきたといって売りに来るのです。日本では考えられませんが、こういったものでも研究に使える資料であれば分析しようということで購入しました。しかしながら、この時期のものがなく時期的には外れていました。

ハノイの調査では、高級ホテルの部屋にブルーシートを敷いて、私が整理や分類といった調査法を指導しました。我々がベトナムでまずしたことはスーパーに行き、銭貨の分類箱として使用するためのタッパーや製氷皿を買ってくることでした。夜間作業のためランタンも買いましたが、これらの道具類は全部、調査が終わったら現地に置いてきました。一括出土銭もすべてベトナム国立大学ハノイ校の博物館に寄贈してきました。

ベトナムで一般的に使われていた銭貨は景興通寶や景興永寶で、日本銭の寛永通寶や元豊通寶も混じっています。中国の清朝銭には裏面に鑄造所が刻んであるので製造場所がわかります。この調査では緞紐の材質の鑑定もやりましたし、銭貨を切断して断面状態で成分分析をしたところ、銭貨の表面はコーティングしてあることがわかりました。日本の考古学では出土物をカットするようなことはできませんが、ハノイの遺物からこういうことがわかったので、今後の課題として見えてきました。また、私はベトナムで初めて緞をつくるための木製定規を見ました。（図23）銭貨の丸みのようにくぼんでおり、台の片方に円形方孔の銭貨が刻まれていることから、緞銭用の道具だと分かります。

次は、ハノイの南方300キロに位置するハティンで調査をおこないました。ハノイ調査から数年後だったので、ベトナム人も調査方法をわかっていて、博物館のスタッフが銭種ごとにタッパーに入れて仕分けをしてくれていたのも、調査期間は短く済みました。ただし、ベトナム側で用意してくれたデータの訂正はおこないました。余談ですが、ハティンは地方都市なので、日本から調査に来ていることがローカルテレビのニュースになりました。2020年12月25日には、



ベトナム国立大学ハノイ校の先生方と会議室を借りて研究会をおこない、私は出土した日本銭の元豊通寶や寛永通寶について報告しました。

さらに、私はラオス調査に行きました。その理由は中国の穴あき銭がベトナムに入っているけど、どの地域まで普及しているのかが気になっていたからです。たまたま大学院生を指導する関係でラオスに行くチャンスがあり、ベトナムと国境を接しているシェンクアン県では銭貨の出土例を確認できました。しかし、それ以上西に行くと銀貨の経済圏になっていて、円形方孔の銭貨はほとんど見かけませんでしたし、聞き取り調査でも人々に穴あき銭を使っていたという記憶がありませんでした。シェンクアン県での聞き取り調査では、穴あき銭の塊を土中で見つけたことがあるけれど、拾って罰が当たると困るので元通りに埋めたという話を聞きました。また、日本国の援助でビエンチャンの国道整備をしたところ、ある遺構からたくさんの小さな貝貨が出土していることを確認しました。

ラオスでは情報文化省の次官や骨董店でも聞き取り調査をしました。タイ型の長細い銀貨幣はたくさんありましたが、穴あき銭はほとんど見かけませんでした。また、オーストラリア大学の調査隊が発掘しており、穴あき銭が数枚出土していましたが、彼らにはその同定ができていなかったのを教えてあげました。海外での調査は劣悪な条件下でやらなければならない、時間と費用も限られているので調査は難しいと感じます。

また、海外から貨幣の鑑定で問い合わせがくることもあります。例えば大英博物館からは、近世のがん首銭について問い合わせがきました。がん首銭はキセルの火皿の部分を押潰したものです。これはお金ではないのですが、形状が似ているのでお金のようには使われました。江戸時代の書物には、托鉢坊主が来たのががん首銭を渡したという記述があります。オランダからも問い合わせが来たことがあります。東インド会社の貿易に関係するオランダ沖合の島を調査した時に出土した銭貨の写真が1枚送られてきたのですが、それは長崎でつくった元豊通寶でした。まさに、その土地の特徴をあらわしている遺物でした。さらに、永暦通寶は鄭成功が長崎に注文してつくらせた銭貨ですが、台湾では10例ほどが墓の中から出土しています。日本ではこれまで出土例を確認できなかったのですが、博多遺跡群第221次調査で1枚出土し、さらに探してみると柳川市上町遺跡からもすでに1枚出土していました。私にとって、長崎関係の銭貨を調べることはこれからの研究課題です。

考古学の復元実験は重要で、私は寛永通寶の鑄造実験を2010年に下関市立大学でやりましたし、奈良文化財研究所は富本銭や和同開珎の鑄型をつくって銭貨製造の復元実験をやっています。溶けた金属が入る坩堝の大きさによって、1度に何枚の銭貨をつくれるかが決まります。また、小判の表面を黄金色に見せる色揚げという技法についても、国立歴史民俗博物館が実験をやったことがあります。

さらに、遺物の年代を特定する方法として、残留地磁気年代測定法というものがあります。富山大学にはその実験装置があるのですが、私が先の下関市立大学でつくった鑄型と枝銭をそ

の基礎資料として寄贈しました。出土銭貨の年代を特定する方法について、さまざまなことを試してみたいのです。それから、今は何でも AI でできる時代になりましたから、私は銭種の鑑定をコンピューターでできるのではないかと考え、研究仲間に協力してもらって実験しているところです。現時点で、寛永通寶については95～98%まで判別できるレベルになりました。新たな科研費がもらえれば、この研究も続けていきたいと考えています。例えば元豊通寶、元符通寶、元祐通寶の一番上に来る文字はいずれも「元」ですが、その部分だけの破片で残りの部分がなくても銭種がわかるのではないかとということで研究を進めています。

最後に、貨幣の呪術的使用について触れておきます。古代の銭貨が土師皿とともに埋められている例が存在します。銭貨は劣化がひどくぼろぼろになっているケースも多いのです。また、近世の地鎮遺構例ですが、東京都港区のテレビ朝日の横にある毛利庭園の池を整備する時に、土師皿と銭貨と輪宝が出土しました。これはセット関係からみても呪術的使用であることは間違いありません。銭貨は永楽通寶の金銭と銀銭が含まれていました。つまり、近世になっても特別につくった銭貨を埋める例があるので、先ほどの質問にも関わってきますが、出土した銭貨がすべて流通貨幣とは言えないのです。一点一点の銭貨について吟味しながら資料として使っていくないと、解釈を間違ってしまうことがあると思っています。

以上、駆け足でしたが説明を終わります。

菊池（雄） ありがとうございます。それでは残りの時間を使って質問やコメントをいただきたいと思います。

菊池（美） 永暦通寶は長崎でつくられていたのですか。

櫻木 これは文献記録が残っており、鄭成功が日本に発注してつくらせた銭貨です。しかし、日本では使われていないので出土するはずはないのですが、つくっていた関係で一部が何らかの理由で流出し、出土するのかなと考えています。台湾では墓の中から出土しているものが多いようですが、考古学的に検出できる永暦通寶が存在します。

菊池（美） 商業行為のためにつくられたのではなく、埋葬するためにつくられたのですか。

櫻木 埋葬用ではありません。なぜ貨幣を発注したかという点、先ほどの長崎貿易銭もそうですが、丸くて四角い穴のあいたものは当時の東ユーラシアでは経済的に一番有効な機能を持っていたのです。したがって、銭貨の生産国として日本は非常に魅力的な場所だったと思われます。ただ、日本では政府がコントロールして寛永通寶をつくるようになっていたので、寛永通寶を外には出せない。だから長崎貿易銭を別につくったということと、鄭成功は自分が支配している地域で使う銭貨が欲しかった。銭名が何であろうが、丸くて四角い穴があいているものは貨幣なのです。流通銭貨を埋葬時に使用することは六道銭の例からも明らかです。

菊池（美） 日本でつくらせたのは、コストが低かったからですか。

櫻木 現代人は製造コストを考えるとしますが、当時はどこならつくれるかと考えた時に、日本は銭貨の生産場所として非常に有名だったのです。それが既成事実になっていたと思います。

今日は述べませんでしたが、ベトナムの文献記録には「ミト」あるいは「サカモト」とよばれていたお金があります。これは寛永通寶より前のものです。つまり、17世紀初期に日本のお金がベトナムでも認識されていたのです。ですから、コストについてはわかりませんが、錢貨の生産は日本が一番だということで日本に発注したのだと思います。

**菊池（雄）** 鄭成功の話が出ましたが、中国では新しい通貨を発行することに政治的な意味合いが強いと思います。その意味において鄭成功は何としても新しい通貨をつくりたかった、ということは考えられるでしょうか。

**櫻木** それは十分に考えられます。施政者であるが故に貨幣を発行するということです。ただ、実際に自らが錢貨を発行しなくても、中世の日本の領主たちが独占的に輸入することによって発行するのと同じ意味を持たせていたということに通じるとは思います。鄭成功の場合には国家意識というものがかなりあったのだと思います。台湾でつくろうとも考えたのでしょうか、つくれないなら自分が生まれた日本でつくろうと考えたのかもしれません。これは想像です。

**西崎** お金はどのくらい人々に行き渡っていたのでしょうか。時代によると思いますが、物々交換と併用されていたのでしょうか。

**櫻木** 前近代について答えると、いわゆる皇朝錢という奈良時代から平安初期のお金は畿内を中心とする地域でかなり使われていました。それは出土数も多いことからわかります。その後、150年ほどのブランクがあり、いわゆる日宋貿易の中で平清盛らが宋錢を輸入し、それが本格的に商業の中で使われるようになっていきます。大量の錢貨が使われていたことは一括出土銭からもわかるし、都市部では個別出土銭も出現します。ですから現代ほどではないにしても、我々のイメージする商業行為の中でお金は使われていたと考えて良いのではないのでしょうか。また、錢屋というものが絵画資料に描かれていますので、16世紀には都市部を中心に潤沢な錢貨が商行為の中で使用されていたと思います。そういう意味では古代から江戸時代まで、物々交換が主であったとは想像できません。

**田中** 緡錢に関連して、近世の日本では1貫を1文錢1,000枚でつくる時に、正確に1,000枚でつくるというより信用で流通するといった話を聞いたことがあるのですが、そういう捉え方は緡錢についてもできないですか。97枚になっていたことに意味があるというより、信用で100枚と見なしていたというようなことはありませんか。

**櫻木** 97枚でも100枚と見なしていたと私も理解しています。当然、緡錢に対する信用が基盤にあり、近世になると96枚となり九六錢とよばれるようになります。素数は使い勝手が悪いので、96は4の倍数ですし、江戸時代には4文錢も出てきます。そういうことで97枚から96枚に変わりますが、それも100枚という認識で使っていたと思います。ただ、ベトナムでは先ほど述べたように67枚の緡錢が存在しており、なぜ67枚なのかについてはわかりません。100の $\frac{2}{3}$ ということになりますが、文献研究者に聞いても誰も答えてくれません。考古学的には、出てきたものが何枚だったかということしか言えません。

田中 太宰府天満宮の鳥居に錢貨がはさまっていたというお話がありましたが、江戸時代にはお金を埋めてはいけないというお触れが出るくらい大事にされていて、その一方で鳥居に封じ込めるようなことをしていたというのはどう考えるべきでしょうか。

櫻木 私も若い頃に、それについてはすごく悩みました。特にお宮の参道などの場合には呪術的な意味もあるのではないかと思ったのです。そこで、現代の石工さんに聞きとりをしました。それによると、今でも1円玉などを使ってそういうことをやっているそうです。石と石の間にすき間がある時に差し込んでおくのです。お金は金属の延展性があるので、次第になじんでガタがなくなるのだと言われました。太宰府の例では漆喰も使っていますが、よく調べてみると、小さいすき間には1枚、すき間が大きいところでは3枚はさまってたりしますので、鳥居ではありますが呪術的な意味というより、職人が技術的な理由から入れたものと私は結論づけています。

田中 写真では、ずいぶん中のほうまで錢が入っているように見えます。

櫻木 私もなぜこうなっているのだろうと考えました。周辺に錢が並んでいますが、途切れているところもありますよね。そこに入れてあった錢が抜き取りや何かの原因で移動したのだろうと考えています。

菊池（雄） 緋紐の素材も重要で、そこにもこだわって見ていくというお話がありました。紐素材から見えてくるものというのは何でしょうか。何でできているか、どのような扱い方であるか、などから判明するものとは何でしょう。

櫻木 はい。例えば藁縄の場合に、2本巻きなのか3本巻きなのか、あるいは右巻きなのか左巻きなのか。それは職人の癖もあるでしょうから、それがわかったから何なのと思いますが、緋紐として機能するためには紐は強い材質でないとはいけません。京都の革職人が住んでいたと言われる場所で調査された緋紐の例があって、そこでは革紐でした。また、ベトナムでは亜麻が主で、日本では藁縄が多いのです。ともかくそういう事実を明らかにしていくのが考古学だと思います。

資料整理はとても重要なことで、鈴木公雄先生は「考古学者の責任は資料の整理にある」とおっしゃっていました。だれでもが使える資料になっていないといけないということです。今でも未整理のままになっている資料はたくさん存在します。私のように自由に動くことのできる人間は、自分の持っている予算で各地に行って調査をし、資料のデータベースをつくって、将来の研究者がそれを使って研究してくれればよいと思っています。壊さずに残してある資料もたくさんあるので、新しい技術が出てきた時に新たな発見があるかもしれない。たとえば一括出土錢を壊さずに、大変ですが1枚ずつCT断層写真で錢銘を読んでいくという調査方法も実際にあります。櫻木が調査をした後の一括出土錢は全部壊れていたといわれるのは私も嫌なので、なるべく壊さないように最大の努力をしながら保存をし、歴史資料として残していきたいと考えています。

菊池（雄） いま貨幣考古学の継承の問題ということに触れられましたが、残留地磁気年代測定は、現在はどのような状況になっているのでしょうか。

櫻木 酒井英男先生は定年退職されたので、引き継いでやってくれる人がいるかどうかということです。私が今関係している科研チームでは、銅の錆を分析することで年代が判るといった研究もあります。そういうアイデアは我々では考えつかないので、いろいろな分野の専門家たちと協力しながらやっていくことが重要だと思います。現在、富山大学とは接触していないのですが、急がずにできることからやっていこうと思っています。

湊 研究方法が進歩していくと、ある銭がいつの時代のものをつくり直したといったこともわかる可能性はありますか。

櫻木 なかなか難しい質問ですね。政府がつくった銭貨かどうかは、状態がよければ基本的にはわかります。ただ、つくり直しというか模鑄であるかどうかは今のところ明確にはわからないし、材質によって一部はわかるにしても難しい。将来それがわかるようになるかということ、私の予測では無理だと思います。これまで私は40年くらいの間に何十万枚という銭貨を実見してきましたが、難しいだろうと思います。貨幣を専門にしていない人に判定できるかといえば難しい。機械で分析するにしてもすべての遺物について検査をやることは不可能ですし、技術的にはなかなか難しいのではないかと思います。政府がつくった制銭を鑄つぶしても原料自体は変わりませんから。ただ、錆の年代を特定できれば、もしかしたらわかるのかもしれない。最近はコロナ禍で対面の研究会が一回もできておらず、やっと来年2月16日に東京で研究会をやることが決まりました。錆で年代がわかると期待して、研究会に臨みたいと思います。

菊池（雄） 先日デンマークに行かれたということですので、その時の成果を教えてください。

櫻木 その話は次回にしたいと思っていますが、簡単に説明します。日本学士院は100年以上にわたって、海外に散在している日本関係史料の翻刻を東大資料編纂所に依頼して続けていますが、これ以外に何か新しいプロジェクトを立ち上げなければならないと考えたようで、私の研究に白羽の矢が立ちました。外国人にも貨幣は理解しやすく、日本の貨幣を研究しており、なおかつヨーロッパに所蔵されている貨幣のデータベースをつくっている私に新しいプロジェクトをやらせようと考えたようです。その最初の仕事が、私がすでに手を付けていたデンマークの仕事で、来春までに日本学士院から成果物としてハードカバーのカatalogを刊行します。

和暦の研究者として有名なデンマーク人のブラムセンという若者がおり、明治4年から明治13年まで日本で活動していました。この人物は日本に海底ケーブルを敷設するため雇われ来日したのですが、古銭の収集をしており、彼が所有していた日本貨幣がデンマーク国立博物館に収蔵されているので、そのデータベースを私がつくっているのです。

明治10年前後に集められたものなので、現代の収集物に比べて不良な混じりものが少なく、彼のコレクションは非常に良質です。これはあまり知られていないのですが、幕末、明治初期には日本各地で貨幣がつくられており、その試作品と思われる貨幣が彼のコレクションにはた



くさん含まれています。私は初めて実見するものばかりで、文献に書かれていないものもあり、これから調べていかなければならない課題も多くあります。カタログは500部つくる予定ですが、300部は日本学士院が研究機関などに配布し、200部を販売しようと考えています。

最後の話題として、このコレクションにてっさり本物と思っていた「武蔵墨書小判」があります。これは慶長小判をつくる前段階の墨書小判で、家康が天下を統一する直前の小判と言われており、良いつくりなのですずっと本物だと思っていました。しかし、いろいろな人に鑑定してもらっているうちに、これは贋作だろうということになってしまい、私も間違いだったと言わざるを得なくなりました。ワルシャワ大学で学会発表した時に、すごく良いものだと言ってしまったのですが、これは謝らないとしょうがないです。ともかく、彼のコレクションには幕末から明治初期の日本貨幣史を明らかにするための資料となるもののがかなり含まれています。

菊池（雄） それでは、今回は今お話されたような内容も紹介していただくということになります。今回は貨幣考古学の現場の話が多く、我々文献史料を扱っているので非常に新鮮でした。私も櫻木先生の弟子となってフィールド調査に連れて行っていただきたいと何年か前から言っていたのですが、コロナのためにそれもできず、今ようやくできそうな状況になってきたので、そろそろとも思っています。皆さんも今日の講演を聴いて興味を持たれましたら、ぜひ一緒に行きましょう。

櫻木 今週の金曜日には南さつま市に調査で行くのですが、ここは本当に不便な場所です。科研費を使いますので、向こうの自治体には費用負担をかけません。当地で出土した錢貨が何であるかわからず、アドバイスが欲しいと言ってきているので行きます。

菊池（雄） 本日はありがとうございました。これで終わりたいと思います。

[終了]

#### 引用文献

Mark Blackburn 2005 「COIN FINDS AS HISTORICAL EVIDENCE FOR MEDIEVAL EUROPE」

第12回出土錢貨研究会大会報告要旨『貨幣に見るダイナミズム—欧・中・日比較の視点から—』

壱岐市教育委員会 2006『都城跡』

岩国市教育委員会 2016『中津居館跡Ⅱ』

埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2020『新井堀の内遺跡』

櫻木晋一 2007「出土錢貨からみた中世貨幣流通」鈴木公雄編『貨幣の地域史』（岩波書店）

昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.12/2008『ベトナム北部の一括出土錢の調査研究』

昭和女子大学国際文化研究所紀要 Vol.16/2012『ベトナム北部の一括出土錢の調査研究2』

かながわ考古学財団 2020『東富岡・北三間遺跡第3地点』